

進路指導における三年間の取り組み

デネブ高等学校
進路指導部

1. はじめに

デネブ高等学校は、平成12年4月1日に開校して以来、区切りとなる三年間を終え、更なる発展を目指す四年目を迎えることになりました。しかし、これまでの進路指導に関していうならば、まさに暗中模索といった言葉があてはまる状態でした。

開校以来、すでに293名の卒業生を社会に送り出しました。初年度は通信制の進路指導を経験した者がいないため、全日制の感覚で進路指導をおこない、多くの問題点が浮彫りになりました。二年目からは、進路指導担当者として本校生徒の現状を理解することに努め、改めて、通信制高校であるデネブ高等学校の進路指導について、全日制とは異なる指導のあり方や指導方法の確立を目指しました。三年間の経験の結果や一つの形ができたように思います。

今回は、改めて進路指導という観点で、三年間を振り返るとともに、今後の進路指導のあり方について考えてみたいと思います。

2. 本校生徒の現状

本校は通信制・単位制の高等学校であり、年2回（春、秋）それぞれ入学式と卒業式があります。入学生は、中学新卒、高校転入・編入とさまざまであり、年齢も15歳から60歳を超えるなど幅広い年齢層で構成されています。また、有職者も多く、学習時間の確保がかなり厳しい中で、多くの生徒は自分の目標に向けて努力をしています。

次の「デネブ高等学校を選んだ主な理由」(表1)が示すように、本校生徒の多くは高校卒業を目標としており、高校だけは卒業したいという強い思いを持っています。

(表1) デネブ高等学校を選んだ主な理由 (%)

年 度	2001	2002	2003
自分のペースで勉強ができる学校だと思った。	28	30	22
自分の自由時間が多く校則が少ない学校だと思った。	17	12	18
創作活動など幅広く勉強できる学校だと思った。	2	4	4
高校だけは卒業しておこうと思った。	46	48	48
何となくこの学校へくることとなった。	7	6	8

3. 進路指導の取り組み

生徒の多くが卒業を一番の目標としている現状を考慮

すると、画一的な進路指導を実施するのは困難であると思われます。生徒一人ひとりの学習状況や学力を把握し、的確な進路指導をおこなうためには、月2、3日あるいは週2日程度の限られた登校日の中でも、先ず生徒との対話が重要であると考えました。

その第一歩として、生徒や保護者に進路指導部の存在をアピールし、気軽に何時でも相談に来ることのできる状態にする必要があると考え、次の「卒業後の進路希望状況」(表2)のような簡単なアンケートを実施しました。このアンケートをもとに進路指導をおこなうのではなく、アンケートをきっかけに進路について考えてもらうことを目的としました。

(表2) 卒業後の進路希望状況 (%)

年 度	2001	2002	2003
大学・短期大学へ進学	18	21	17
専門学校へ進学	30	18	23
卒業後に就職する	15	13	11
現在とは別の会社やアルバイトにかわる	3	4	1
現在の会社やアルバイトを続ける	13	5	8
その他	5	3	5
未定	16	36	35

このアンケートの結果は、卒業生の進路状況とほぼ一致し、進路を意識した生徒は確実に活動をしていることが伺えます。このアンケートにより生徒の進路に対する考えが明確になったことは、生徒の実態に応じた指導をおこなう上で、とても有意義であったといえます。

次に、実際の進路指導の方法ですが、アンケートをもとに、生徒とのコミュニケーションを深め、進学、就職に関する具体的な動きや手続きについて指導をおこないました。また、生徒と保護者、担当教諭による三者懇談、ホームルーム単位での進路指導、進路指導部からのお知らせの送付など、いろいろな形でアプローチをしました。これにより少しずつではありますが、生徒や保護者の進路に対する意識が高まり、相談者が増え、進路指導が活発化しました。また、同時に進路に関する情報や資料を何時でも閲覧できることを目的に、相談コーナーを整備し、インターネットの活用による積極的な情報収集を推進しました。

4. 2002年度の就職状況

本校生徒は、有職者や日常的にアルバイトをしている生徒が多く、就職に関しては、是が非でもという感じはなく、できればというような希望にとどまってい



インターネットで求人
情報を確認する生徒



相談風景

るのが現状です。

県教委が中心となり開催された「高校生のための就職ガイダンス」に就職希望者を中心に声を掛けましたが、参加者は三名にとどまり、生徒の積極的な動きが感じられませんでした。生徒が自主的に就職活動ができるような指導と環境整備が今後の課題と考えられます。また、就職希望者が最終的に就職決定に至らなかったのは、少ない求人という現状もありますが、進路指導部として企業に対する積極的な働きかけの不足なども大きな課題であると認識しています。

5. 2002年度の進学状況

本校卒業生の進学率は平均40%で、ほぼ進学希望者の割合と一致しています。その内、40%が大学または短大に、60%が専門学校に進学しています。進学指導をおこなってきた過程で次第に見えてきた問題点は、生徒と極めて限られた時間しか接する機会のない通信制というシステムの中で、いかに生徒の学力を的確に把握し指導をおこなっていくかということでした。そこで三年目から公開模試を利用することにしました。学校で模試の案内を掲示したり、卒業予定年度生に文書等で案内を送ったりして希望者を募り、公開会場で受験させました。他校の受験生たちと一緒に模試を受けさせることは、生徒に受験生としての意識を促すとともに、本校の進学指導を少しでも早く始める上で大きな意味があったように思われます。

その他の取り組みとしては、最近かなり実施校が増えているAO入試、自己推薦入試等に対応するために進学者には「小論文」を選択するように指導し、また、「課題研究」では弱点補充もおこないました。面接指導も幅広い内容でおこない、十分とは言えないまでも入試対策の形は少しずつ整ってきました。

平成14年度の進学状況としては国立大学2名、公立短大1名、私大21名、専門学校41名となっています。

その中でも特筆すべきは、本校に中学校新卒で入学し3年間在籍した初めての卒業生が広島大学に合格したことです。私大についても関東、関西のいわゆる難関校に合格者が出ており、本人の努力が一番でしょうが本校の指導の成果も表れていると思われます。

6. 今後の取り組み

進学希望者は年々増加しています。就職についてはますます厳しい時代になると考えています。特効薬的なものは存在しませんので、さらに綿密な進路指導が必要であると考えています。

具体的には、就職に関しては進路指導部を中心にした求人活動を積極的におこない、就職ガイダンスなどには生徒の積極的な参加を促すことを基本活動として捉えます。また、指定校制度（特定高校からの採用）などに対しては、指定校の対象となれるようにきめの細かい指導や求人活動を積み重ねていくことが重要であると考えています。

2000年度、難関を突破して見事希望の就職を果たした生徒がいますが、彼は、多くの資格を取得し、積極的な就職活動が実を結んだのです。その企業からは毎年求人を頂いています。

実社会では、ワープロ、表計算は使えて当然のような状況になりつつあり、就職希望者は検定や資格試験をできる限り取得することも重要となってきました。本校は、情報分野に大きな力を注ぎ、検定や資格試験にも結果を残してきました。この結果を就職活動に生かせるように指導をおこなっていくことも一つの重要なポイントとして捉えています。

進学については、今後さらに受験者、受験先が多様化することが予測されます。これに対しては情報量の不足が否めません。今までは、生徒の受験校が分かった時点で、詳細な情報を入手するといった状況であり、生徒に提供できる学校情報や入試情報が少ないことは大きな問題です。今後は、進学に関する情報のデータベース化をすすめ、生徒の希望する進学先と生徒の学習状況が一致するようなシステムを構築することが急務であると考えています。これについては、就職にも応用できると考え、進路指導全体の取り組みとして検討しています。すでに、進路に関するデータはコンピュータサーバーで一括管理し、共有データとして活用していますので、これをリアルタイムに生徒に提供できるようなシステムとして発展させることで可能であると考えています。

本校においては、通信制高校であるがゆえに、進路指導の体系化はとても難しいと思いますが、今までの経験と充実したコンピュータネットワークに、積極的なフットワークを加え、生徒主体の進路指導をおこなっていきます。